あとがき

——龍子と茅舍——

この書出しから一寸樣子が異つてゐると思ひます。本來ならこの書は茅舍の俳句に關するものである以上、その跋文では當然「茅舍と龍子」とあるべきでせうが、さうなると云ひたいことが云ひにくいので、自分を上へ持つて來たがさうかと云つて俺は兄である……などいふさうした狹い量見では無い。

茅舍は自分より一廻り齡下の異母弟である。父は彼を醫者にする積りで獨逸協會中學校へ入れたのだが、中學を出る頃には醫者を嫌つてゐた。さうかと云つて瞭りと何になるといふ意志も口に出さなかつたが、既にその頃に龍子は別居して家庭を持つてゐたが、彼は學校の歸途によく立寄つたもので、その影響でもあつたらうか、中學を卒業すると洋畫をやるつもりらしく岸田劉生氏に接近して、草土舍風の拈びれた靜物の小さなものを見せに來たものだつた。

元來彼は中學時代は水泳の師範代もやつた丈夫らしい體の持主だつたが、その母の系統か、中年からは蒲柳の質といつた風に變つてしまつた。

父の商賣は煙草の小賣商のかつ〳〵の生活であつてみれば、茅舍にしても、自力自活の方針を立てねばならんのだつたが、その體力ではといふ點からでもそれ相當の仕事の道をと考へて、俳